ひと

ブッシュマン研究50年

田中 二郎（たなか じろう）さん（74）

京都大名誉教授。日本とアフリカを約30回往復した。今は長野・安曇野で晴耕雨読の日々を過ごす。京都市出身。

アフリカ南部カラハリ砂漠に暮らすブッシュマンを50年にわたり研究、9月にウィーンで開かれた国際狩猟採集民会議で、英国、カナダの研究者とともに「第1回生涯功績賞」を受賞した。

サル学にあこがれ、京都大に入学。やがて「人類進化を解明するには、狩猟採集民を探らねば」と考え、1966年に初めてアフリカに足を踏み入れた。

1年近く砂漠を歩き、昔ながらの生活を守る集団を発見、半年間暮らしを共にした。2度目は妻と生後9カ月の長男も伴って1年半。「若いからできたことやろね」と振り返る。

彼らを知るにつれ「砂漠の生活は貧しく常に飢えにさらされている」という見方が偏見と分かった。「砂漠にも食べられる植物が100種類以上あり、1日3～4時間採集をすると、後は昼寝やおしゃべりをして過ごす。たまに狩りで仕留めた獲物があれば、徹底して平等に分配される。そして、穏やかで底抜けに明るい」

だが、79年にボツワナ政府が定住化政策を進めたことで、生活は一変。弓矢を捨て、年金に依存する者が増えた。そんな姿を見て「一度快適な暮らしを手にすると元に戻れないんやろね」と憂鬱になる。

しかし、希望もある。「教育を受けた若い世代が大学院に進み、自分たちの文化を研究している。自然を信頼して生きてきたブッシュマンの知恵を彼らが伝えてくれるのでは」

文と写真・榊原雅晴

2015・11・25